「ドキュメンタリーは嘘をつく」を読んで

本ではノンフィクションもの、TV ではドキュメンタリーものを主に目にしているだけに、店頭で「ドキュメンタリーは嘘をつく」のタイトルの本が目に止まり、迷いなく購読した。

著者は、ドキュメンタリー映画監督？テレビ・ドキュメンタリー・ディレクター？ノンフィクション作家？大学客員教授？ジャーナリスト？と聞かれると戸惑い、自称「映像表現従事者」と応えるよう。

著者が月刊誌に一年にわたり「ドキュメント・オブ・ドキュメンタリー」のタイトルで連載した記事を大幅に加筆・修正して出版された本だけに、世界や日本のドキュメンタリーと言われる数々の作品に触れつつ、また、今の TV 業界のドキュメンタリー番組等にも触れつつ、著者独自のドキュメンタリーの論考の書であった。

著者は、「優れたドキュメンタリーは、政治的でもないし、学術的でもない。客観的でもないし、公正でもない。もっと悪辣で自分本位で自由なジャンルだ。徹底して一人称なのだ。全ての映像は主観の産物。」という。
「ドキュメンタリーとは、事実の客観的記録」という一般的な思い込みからすれば、客観性の対極の「主観の産物」は嘘ということになり、書名が「ドキュメンタリーは嘘をつく」になったと思われる。

また、著者はドキュメンタリーは、被写体との関係性に基づいて「悪辣で自分本位で確信犯的にカメラを回す覚悟をする葛藤と苦悩の産物」ともいう。
この筆者の視点からは、ＴＶで放映されている最近のドキュメンタリーには、企画者や制作会社の自己規制が働いて無難なパッケージ化したもの作ろうとする傾向があり、撮る側の被写体との関係性の葛藤と苦悩が感じられるものが少なくなってきたことが、優れたドクメンタリー番組の衰退に繋がっているのでないかともいう。
確かに、ドキュメンタリー番組で、撮る側と撮られる側の息遣いが感じられないものは単なる情報番組であり、あまり見た甲斐がない。

自分はドキュメンタリーといっても「発信者の意図で編集されているもの」との前提で視聴している。
ただ、そうした息遣いから対象の方の生き様（よう）を垣間見て、それらを参考にして自らの生き様をどう思索するかが必要な作業と思っている。

「人間」は不可思議な存在。
ドキュメンタリーは、自分自身を鏡で見て「人間」というものを知っていくようなところがあるから、視聴を止められない。

阿部幸泰　　（2012 年 6 月 19 日　記）